

聖書：ダニエル書 1：1～21

説教題：バビロンの国で

日時：2014年11月9日

今日からダニエル書を見ます。イスラエルは南北に分裂し、北イスラエルは紀元前 8 世紀にアッシリアに捕囚されましたが、そこから学ばなかったために南ユダ王国も紀元前 6 世紀に当時の世界帝国バビロンへ捕囚されることとなりました。そのバビロンへ連れて行かれたダニエルと 3 人の友だちを中心にダニエル書は記されています。その書を今日読むことにどんな意味があるのでしょうか。彼らはここで外国生活を強いられています。主なる神を神とするのではない異教文化の中での生活です。これはまさに今日の私たちに通じるものではないでしょうか。「私たちの国籍は天にある」(ピリピ 3 章 20 節)。クリスチャンの地上の生活は新約聖書で外国生活にたとえられています。まさに私たちが住んでいるこの社会は異教社会です。そこで私たちはどのような信仰に立ち、どのように歩いて行くべきか、この書から多くのことを学ぶことができるに違いありません。

まず当時の状況を見て行きたいと思います。1 節：「ユダの王エホヤキムの治世の第 3 年に、バビロンの王ネブカデネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。」これは紀元前 605 年の最初のエルサレム攻略の時のことです。カルケミシュの決戦でエジプトを破り、世界の覇者となったバビロンはエルサレムにもやって来て、神殿の器具の一部と少数の人質をバビロンへ持ち帰りました。その中にダニエルたちもいました。これはイスラエル人にとって悪夢のような出来事でした。まさか神の都は落ちないだろうと彼らは考えていました。エルサレムはどんなことがあっても大丈夫という誤った楽観主義を持っていました。しかしとうとう敵が聖なる都も支配し始めたのです。神の臨在の象徴であるエルサレム神殿にまで手を伸ばしたのです。

しかし注目すべきは 2 節に「主が」とあることです。人間の目で起こった出来事を見つめるなら、これらのことを行なったのはバビロンの王ネブカデネザルでした。しかしこれらの状況全部を手中に収めて歴史を導いておられたのは「主」なる神であった。バビロンの王ネブカデネザルでさえも、主のみこころが実現されるための主の道具、主のしもべに過ぎないということです。

なぜ主はすべての上におられる方なのに、ご自身の国が外国の敵に渡されるというようなことが起きたのでしょうか。それは主がモーセの時代から警告して来られた御言葉に基づくことでした。もしあなたがたがわたしのおきてに従って歩み、わたしの命令を守り行なうなら、あらゆる祝福があなたがたに臨む。しかしもしわたしに聞き従わず、わたしの契約を破るなら、あらゆる恐れと災いがあなたがたに臨むと。そして彼らが不

従順の道から立ち返らなかったため、イザヤやエレミヤは主のさばきは免れないと預言しました。エレミヤ書 25 章 8～10 節：「それゆえ、万軍の主はこう仰せられる。『あなたがたがわたしの言葉に聞き従わなかったために、見よ、わたしは北のすべての種族を呼び寄せる。一主の御告げ—すなわち、わたしのしもべバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この国と、その住民と、その回りのすべての国々とを攻めさせ、これを聖絶して、恐怖とし、あざけりとし、永遠の廃墟とする。わたしは彼らの楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき白の音と、ともしびの光を消し去る。』」

この捕囚が今や現実のこととなりました。しかしその状況においても、主が主権者であるという真理は、これを信じる者に大きな希望の光を与えるものです。なぜなら世界は異邦人や彼らの王によってコントロールされているのではないからです。偶然とか気まぐれ、時代の流れによって世界の方向性が決まるのではないからです。この状況でも一切を御手に握って支配しておられるのは主なる神である。もしそうであるなら、この主に立ち返るところにこそ、すべての解決と希望があることとなります。このバビロンの地でも、主こそがすべての上に主権を持っている方としてそこにおられたのです。

3 節以降にダニエルと 3 人の友だちが紹介されます。彼らは他のユダヤ人とともに、この 1 回目のエルサレム攻略の際にバビロンに連れて来られました。その彼らについて 4 節に「その少年たちは、身に何の欠陥もなく、容姿は美しく、あらゆる知恵に秀で、知識に富み、思慮深く、王の宮廷に仕えるにふさわしい者」とあります。この彼らにバビロンで行われたことは再教育でした。彼らはカルデヤ人の文学と言葉を教え込まれました。すなわちその文化に馴染む者とされました。また王の食べるごちそうと王の飲むぶどう酒から毎日の分を割り当てられました。すなわち食生活、食習慣から仕込まれました。また彼らには新しい名前が与えられました。ダニエルにはベルテシャツアル、ハナヌヤにはシャデヤラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴ。それぞれイスラエルの神への信仰を表す名前から、バビロンの異教の神に関係する名に変えられました。これはアイデンティティーの変更です。そんな中でダニエルのしたことが 8 節にあります。「ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。」これはどういうことでしょうか。ある人はこの食事にはイスラエルで食してはならない汚れたものが含まれていたからだろうと言います。しかしぶどう酒は汚れたものではありませんから、なぜぶどう酒を退けたのか、説明がつきません。またある人はこれらには偶像にささげられたものだったからだろうと言いますが、野菜が偶像の市場に出回らなかったという証拠はありません。もう一つ考慮すべきは 10 章 3 節でダニエルは「満三週間、私は、ごちそうも食わず、肉もぶどう酒も口にしなかった」と言っていることです。すなわちその

期間以外はごちそうや肉、ぶどう酒を口にしました。ということは、これらがそれ自体で身を汚す食べ物であったことにはなりません。では 8 節はどういう意味なのでしょう。一言で言えば、これはバビロン流のリプログラミングに対する抵抗であったと言えます。ダニエルたちはここでバビロンの人間になるようにというあらゆる面でのプログラムの下に置かれました。名前を変えられ、教育を施され、食事も与えられ、生活全部を管理され、イスラエル人としてのアイデンティティーは捨てて、バビロンの王とその国にすべてを負っている人間になるようにとの扱いを受けました。ダニエルはこのことに危機感を抱いて、できるところでこれに抵抗しようとしたのです。流されるままにすべてを受け取り、王のごちそうにもあずかって、主を忘れる生活に進むのではなく、あえてこのごちそうを遠ざけて、ネブカデネザルにではなく主に対する信仰によって生きるという自分のアイデンティティーを保とうとしたのです。

ここにダニエルの知恵が現わされていると思います。私たちならどうでしょうか。せっかく豪華なごちそうが目の前にあるのだから、それを食べないことはあまりにもったいないと思うかもしれません。しかしダニエルはこれは自分にとって重要な意味を持つ事柄と捉えたのです。今ここでこの食事にあずかることは自分の魂を売り渡すことにつながるかもしれない。そこで彼は主に第一の信頼を置く信仰にとどまり続けるために、この食事を退けるという道を選んだのです。そしてこの選択が彼の信仰を確かに強め、また彼の真の祝福につながって行ったことを私たちは見るのです。

またダニエルの知恵は、この見極めだけでなく、その実践方法にも現れています。8 節でダニエルは宦官の長に願い出ますが、拒否されます。その時、ダニエルは怒って反抗したり、激昂しませんでした。彼は 11 節で世話役に願い出ます。そして 10 日間試してくださいと願って最後に了承されました。真理に堅く立つということはイコール無礼で挑戦的な態度を取ることを意味しません。ダニエルは礼儀を尽くして賢く対応しています。これ以後も彼はこのように生きています。その賢さをもって、彼は異国の地でも大きな影響を与えることができる人になって行くのです。

私たちはダニエルたちの献身の姿と共に、その歩みを彼らに可能ならしめた主のお姿にもしっかりと目を留める必要があると思います。9 節に「神は宦官の長に、ダニエルを愛しつくしむ心を与えられた。」とありました。その直後の宦官の長の答えはダニエルの願いを拒絶したものとなっていますが、おそらくそれは表面的なものだったと思われる。彼は王に対して責任がある者として公には承認しませんでした。ダニエルが世話役に申し出て承認されたことを知って黙認していたと思われる。また 15 節に「10 日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。」とあります。これはまさに主の上からの特別の御業であったと言

わざるを得ません。また 17 節に「神はこの 4 人の少年に、知識と、あらゆる文学を悟る力と知恵を与えられた。ダニエルは、すべての幻と夢とを解くことができた。」とあります。19～20 節にも主の特別の祝福が記されています。そして最後の 21 節：「ダニエルはクロス王の元年までそこにいた。」 クロス王とはバビロニア帝国の次に起こったペルシヤの国の王です。その元年は紀元前 539 年になります。なぜそこまでのことがここに書き留められているのでしょうか。それは私たちがダニエル書の序論とも言うべき 1 章を読み終えるにあたって、この書のメッセージのエッセンスを押さえておくためでしょう。すなわちこの時はバビロンの王ネブカデネザルが支配していたが、その国は間もなく過ぎ行くということです。この後、数代バビロンの王は続きますが、やがてその国は終わる。しかし主と主のしもべはそうでない！バビロンの後に起こる国々のこともこの書で取り上げられますが、それらの国は絶えず移り変わって行きます。しかし主の支配は終わることがない。この主に仕えて歩むことこそ真の祝福の道であるということ、この 1 章最後の節は示しているのではないのでしょうか。

以上のダニエル書 1 章を通して思い起こされる御言葉はローマ書 12 章 1～2 節です。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、きよい、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」ある意味で私たちもこの世にあってあらゆる面からリプログラミングされる危険の中にあります。世俗化という再教育です。この外国生活で、私たちはこの世の人たちと同じものを着、同じ言葉話し、同じものを食べ、同じ考え方をしようとするプレッシャーを受けます。学校や職場に行けば、キリスト教価値観は脇に置いて、そこにいる人たちと同じこの世の価値観で考え、行動するように要求されます。今日の時代の特徴の一つに個人主義や物質主義があると言われますが、私たちもこの世の人たちと一緒に行動する中で、神ではなく、世のぜいたくな商品や便利なシステムが私を支えていると考えられるように誘惑されます。そんな中で何も考えずに世が与えるものを受け取り、それを楽しみ、喜んで行ったら、確かに私たちは世に飲み込まれ、この世の人、バビロン人となってしまおうでしょう。

もちろんだからと言って、私たちはこの世から出て行くのではありません。イエス様は、彼らをこの世から取り去ってくださるよう願うのではない、と言われました。この世にありつつ、この世のものでない生き方へ私たちは召されています。世は食べ物、着物、娯楽、音楽、スポーツ、テレビ、インターネット、あらゆるものを通して、我々

と同じ価値観を持ち、同じ道を行こうと迫って来ます。その中で私たちが周りに同化されないため、世の様々なプレッシャーの中で抵抗すべきことがあるかもしれません。主に第一の心をささげて歩む生活の確保のために、ある事柄には関わらない、自分からは遠ざけておくという選択があるかもしれません。周りの人みんなが楽しい、面白い、一緒に楽しもう！と言っても、その道を行かないということがあるかもしれません。私たちもどの点でそのように判断し、取り組むべきか、そして主への信仰を第一に大切にしていすべきか、ダニエルのような真の知恵と賢さを主に祈り求めたいと思います。そして合わせて覚えないことは、主は私たちが住む異教の地にも主権者としておられるということです。主がダニエルと友人たちをバビロンでも忠実に歩むように守り支えてくださったなら、より困難の小さい私たちが御前に忠実に歩むことを確かに守り支えてくださる。その主が今週、私たちの行くところにも主権者として共にいてくださいます。私たちはそこで主の民として、主との関係を何より大切に、良きものの一切を主に求め、主が下さる永遠に続く祝福にこそ生かされる幸いに進みたいと思います。